

# 昭和41年度平城宮発掘調査概報

平城宮跡発掘調査部

昭和41年度における平城宮跡の発掘調査は第29・32次(補足調査)・33・34・36・39次の8回にわたつて実施した。

第29・32(補足調査)・39次調査は先年から継続中の宮域四至を明らかにする調査であり、第33・36・38次調査では第2次内裏とその周辺を調査し、西方地域の性格をあきらかにする調査の一環として第37次調査を実施した。とくに本年度の調査で特筆すべきは、第39次調査によつて宮域が従来の推定範囲より東へのびる確証をえたことである。それぞれの調査回次、地区名、期間、面積については第1表を参照されたい。

## 第29次調査 東面南門推定地

本次の調査は宮の東限と東面南門を確認することを目的として、その推定地と西側の地域でおこなつた。その結果、従来推定していた位置では門の存在は確認できなかった。以下概要を述べよう。

調査地域の東辺で検出した東面大垣SA4340は、深さ約35cmの掘込み地業が残っているが、門の推定地をわずかに北にいった地点で終わっている。(この点については、後の第39次調査概要で述べる。)

大垣の内側西に走る南北溝SD3410は、第22次(南地区)調査で検出した玉石と杭の護岸設備をもつ溝の南延長部であるが、本地域では

昭和41年度平城宮発掘調査概報

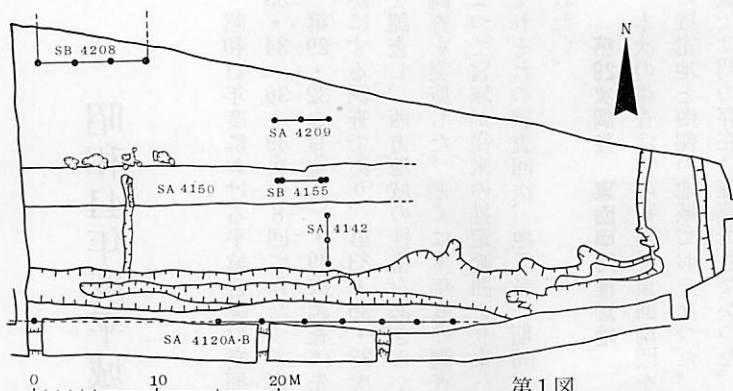
杭列がわずかに残存するのみであつた。

この溝の西岸にそつて南北に築地痕跡が2条(SA4336・4335)ある。この築地より西はこれにとりついて東西に走る築地がさらに2条(SA4337・4376)あり、大きく3分割されている。もつとも大きいSA4336以南の部分はさらに南北柵SA4332・4337と東西柵SA4343などによつて分割されている。

この東西・南北柵の外方東と北には小型の柱穴が多数密に存在し、十数

第1表 昭和41年度発掘調査状況

発掘回次	調査地区	昭和41年度 調査月 日～年 月 日	調査面積
29	6 AAG-M. 6 AAH-C.	41. 7. 1-42. 5. 26	41.8a
32(補足)	6 AAI-C.	41. 5. 1-41. 12. 27	11.8
33	6 AAD-H.I 6 AAE-J.	41. 5. 2-41. 8. 15	29.3
34	6 ACA-D.E	41. 5. 12-41. 5. 26	19.3
36	6 AAP-M.N.O.P 6 AAQ-C.	41. 7. 27-42. 6. 2	56.3
37	6 ACP-C.F	41. 2. 7-41. 5. 25	43.7
38	6 AAC-D.G.J 6 AAD-A.	41. 9. 16-42. 1. 9	33.7
39	6 AAG-C.D.F.G.I.J 6 AAH-R.T	41. 12. 8-42. 5. 26	38.0

第1図  
第32次補足調査地域実測図

第2表 第32次補足調査発見遺構

時期	遺 構	柱 間	柱 間 寸 法		備 考
			桁行	梁行	
A	SA 4120A	2	2.0m		築 地
	SA 4142				
	SA 4150	1	3.0		築 地
	SB 4155				門、そえ柱あり
	SA 4209	2	2.3		
B	SA 4120B	6以上	3.0		築 地
	SB 4208	3×?			根石2間分、柱間寸法3m、棟方向不明

棟の建物柱穴をひろいあげることができるが建物として復元的にまとめられないものが極めて多い。柵の内部には建物が少なく、SB413・414・434など廂をもつかなり大きいものが存していた。出土遺物では土器・瓦が主要なもので、東のSD3410から木簡が、西南部のSK4352では土錘、フイゴの羽口、鉄滓が出土している。

## 第32次補足調査 宮城東南隅

調査地域は特別史跡指定地の東南隅にあたり、すでに昨年度報告した第32次調査の際一部掘りのこした部分である。

検出したおもな遺構は、築地2条・柵4条・建物2棟・門1棟・溝3条などであり、これらは2時期に分けることができる。

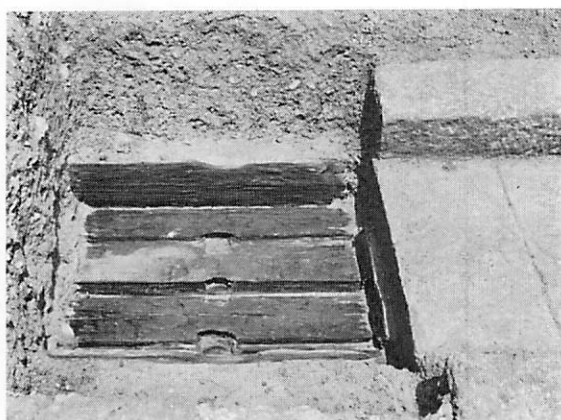
## A期

南面大垣SA4120Aは、従来からの推定線上に基底部(幅2m)と北側雨落溝(幅3m)を検出したが、東面大垣は推定位置に痕跡を見出すことができなかった。南面大垣の痕跡も、東面大垣推定線の内側を走る南北溝SD3410の西岸近くで崩壊した状況で途切れている。南面大垣とSD3410の交点には暗渠の施設は認められない。大垣の北約13mの位置には築地SA4150(幅3.8m)が平行して存在する。その基底部は地山を削り残しており、旧地表面より約10cmの高さで残存していたが、東方の削平が著しく、東端の状況は不明である。この築地上で築地の心に柱筋を揃えた棟門SB4155を検出した。この門はそえ柱をもっており、内側の柱間寸法は約3mである。門の西方には築地を横断して大垣の北側雨落溝に注ぐ南北溝SD4180があり、築地を横断する部分では暗渠の石組施設が残存している。

## B期

南面大垣SA4120Bは北側に約3m拡張され、犬走りに対応する部分には礎石がある。雨落溝は小規模なものに改修されている。

大垣の改修に伴って北側は築地SA4150をとりぞいて広範囲に整地され、この整地面に建物・炉を作っている。建物は礎石を使つたも



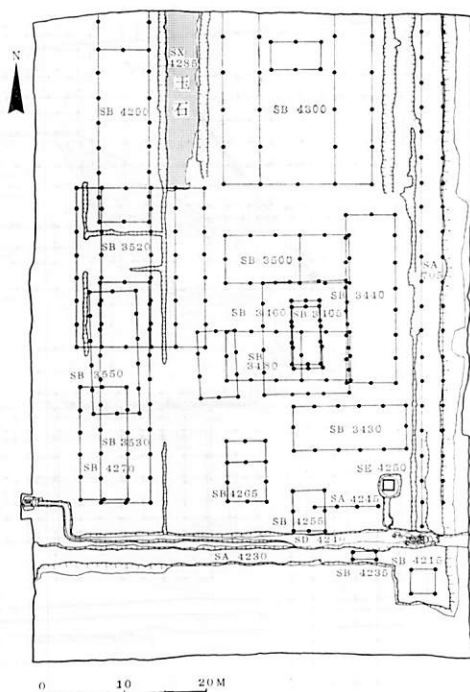
第2図 板ぐみ暗渠末端部

のであり、根石が残存している。炉跡を発掘地域の西端に4カ所検出した。いずれも整地層に掘り込んだ穴の底部のみが残存し、強い火熱をうけた形跡がある。

出土遺物は、土器・瓦・木簡・金属器・木製品などである。とくに木簡は南面大垣の雨落溝から1万点以上出土した。木簡のなかには別に報告するように、人事考課に関係したものが多く、付近に式部省関係の建物があったと推定される。金属製品は、第32次調査の際に外堀から大量に出土した帯金具・工具・飾り金具などと同様なものを多数認めることができる。また、ルツボ・フイゴの羽口・銅滓などの

出土も多く、炉跡の存在と考えあわせて、この区域に製造関係の工房があったことはうたがいない。

今回の調査の結果、大垣SA420Aと第32次調査で検出した築地SA705との心々距離が5.5mあるので、二条大路の幅は平安京より5尺広い17丈5尺という数値になる。



SA4230がある。この築地の東よりに門SB4235がはいっている。これら2条の築地の接続点の南に礎石建物SB4215があり、角楼かもしれない。築地SA4230の北側溝は外郭築地下では玉石積暗渠となり、全面に凝灰岩据付痕跡があつて、底・側には凝灰岩切石を使用したものであろう。西部では北へ屈折し、内郭築地回廊下に入つており、この部分で幅0.8mの板ぐみ暗渠の末端がみえている(第2図)。この位置は内裏内郭築地回廊東南隅にあたり、この溝は内郭内の排水溝にもなつていたのであろう。

この築地と回廊にかこまれた地域では3棟の建物を検出した。

南北棟東西廂つき建物SB4300は外郭築地の西約6mに平行し、南5間分を検出した。柱間は4.5mあつて、かなり広い。その西には幅4mの玉石敷の舗道SX4285があり、それをへだてて桁行9間の同規模をもつ2棟の南北棟SB4290と3530がある。この2棟に重複して検出したSB3520と4270は第2次内裏造営当初のものでない。

SA705の西の井戸SE4230は平安時代のものだが、井戸枠は垂木や床板の転用材であつた。

出土遺物で顕著なものには、玉石敷舗道SX4285上で検出した三彩釉杯(復原径30㍉)があり、東西築地SA4230の両側では軒丸瓦(6311)・軒平瓦(666411)が交互に並んで屋根からずり落ちたかたちで発見された。

### 第34次調査 宮域北部

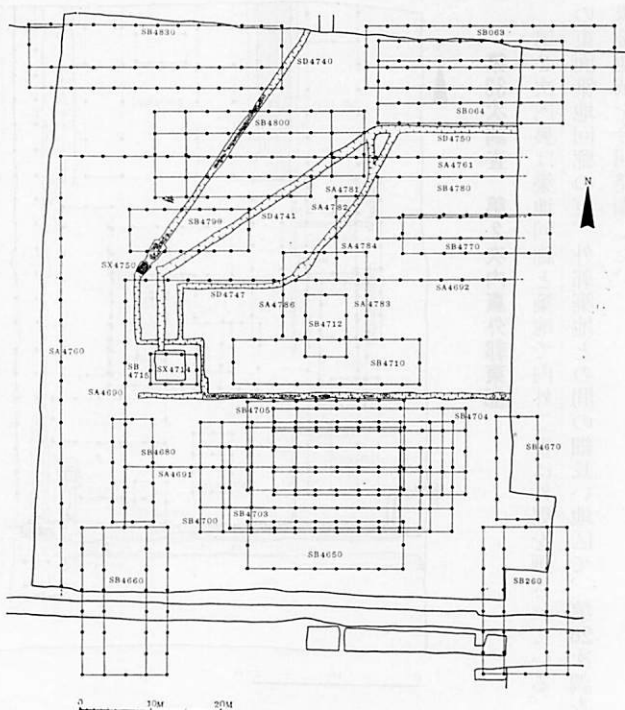
宮の北縁中央西よりの御前池に隣接する民有地で第34次調査をおこなつた。溝、井戸を検出したがすべて平城宮以降のものであつた。こ

の位置に推定される宮北大垣は削平されて、確認できなかった。

### 第36次調査 第2次内裏北地域

第2次内裏地域の調査の一環として内郭北半中央部で実施した。発掘区の南半中央部・内裏中軸線上(以下中軸線と記す)では遺構が著しく重複して検出され、主要部分は少なくともA・B・Cの3期の建てかえのあることが認められた。

#### A期



この期に属する遺構としては、発掘区南寄りの中軸線上にたつ東西棟掘立柱建物S B4700のみがある。この建物は柱間3 mで7間×3間の身舎の4面に、南と北は柱間3.5 m、東と西は4.5 mの廂がつき、さらに東西に柱間3.3 mの孫廂があるものとみなしうる状況で柱穴を検出した。

#### B 期

整然とした計画で建物がたちならんだ時期である。中軸線上に東西棟建物S B4703があり、その前面左右に対称にS B260とS B4660が配置されている。S B4703の背後には柱通りをそろえて東西棟建物S B4710が並立している。これらの建物群に対して、S B4660北妻柱に発する柵列S A4690が北に12間のびて東折し、柵S A4692となつて、大きく建物群をとりかこむ形勢をしめしている。この建物や柵の柱穴は10尺方眼上に整然と配置してある。柵の北方では、玉石溝S D4740が内裏内郭北面築地回廊S C060の雨落溝からの水を斜めに導いて、凝灰岩組みの水だめS X4750にいたり、さらにその排水溝がS B4710の南雨落溝に通じている。

この時期には後半に中央のS B4703がほぼ同規模で北東にずれた位置にS B4704としてたてかえられ、さらにそれと柱通りを一致させて柵の北方にもS B4800・064・4780のC棟の東西棟建物がたちならぶ。その他の建物は同時に存続していたのであろう。

#### C 期

この期になると、建物は全面的に改築されている。まず中軸線上S B4703の位置に中心になるS B4705があり、その前後にS B4650と47

12' 左右にS B4670・4680が配され、さらに背後に対称にS B4770と4790がある。この一群の建物を大きくとりかこむ形勢で柵S A4760と4761があり、その北に中軸線から左右対称にS B4830と063がある。

以上の成果を第3・6・9・12次の内裏内郭の調査とあわせて考えると、B期の一群は、建物配置、10尺方眼による計画性などから、内裏正殿S B450Aや掘立柱回廊S C247・254など第2次内裏創設当初のものと同一計画で造営されたものとしてよい。

C期のS B4705とS B4650がならぶ状況は、内裏正殿S B450Aが同Bに改められ、南にS B447が軒を接してならぶ配置に似ており、同一期と考えてよいであろう。このときには内裏正殿一郭をかこむ掘立柱回廊は廃されたとみられる。こうして第2次内裏内部では大きく2度の造営があつたことが確実になつた。

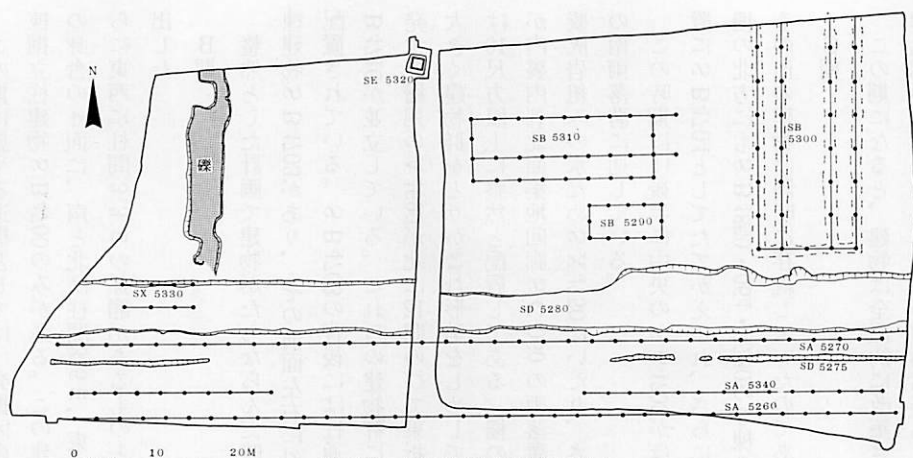
これらを平安宮内裏の建物の配置と比較すれば、B期のS B4703とC期のS B4705は仁寿殿、B期のS B4710は承香殿、B期のS B260・C期のS B4670は綾綺殿、B期のS B4660とC期のS B4680は清涼殿の、それぞれ位置にあたる。平安宮内裏中軸線上北部にたつ常寧殿と貞観殿にはぼあたる位置には、建物はな

く、軒瓦に6313—6685・6666型式の小型の一组と6311—6664の一组が多く、軒瓦に6313—6685・6666型式の小型の一组と6311—6664の一组が多いの似た状態であつた。

#### 第37次調査 宮城西部

調査は第1次内裏・朝堂院地区以西の部分のほぼ中央北よりで実施した。検出したおもな遺構は、建物3棟、柵3条、溝2条、橋1基、





第5図 第37次調査地域実測図

礎敷舗道1条、井戸1基などである。

東西に長い発掘地域の南半では、溝や柵など宮の内部をさらに区画する遺構を重複して検出した。併行して走る溝SD5280や柵SA5270・5340・5260がそれである。これらの溝や柵の存在からこの地域が継続して宮内区画線にあたっていたことがわかる。北半には少数の建物・井戸などの遺構があつた。もつとも顕著な東よりのSB5300は南北棟東西廂つき礎石建物で、建物全面を掘りこまずに柱列部分のみを溝状に掘つて地がためをするいわゆる布掘地業をしてい

る。北部は調査地外にのびているが、桁行10間分までを確認した。この建物はSA5270と柱通りが一致しており、同計画で造営されたものとみることができ、他の掘立柱建物SB5330や5290は柱穴も小々へ、不揃いなものである。井戸SE5330は奈良時代末か平安時代初期のものである。

遺物の出土もすくなく、ただ建物SB5300の周囲では藤原宮所用瓦と同範の66H型式と、通称興福寺式と同系統の軒瓦1組(6301—6671)の出土が顕著であつた。

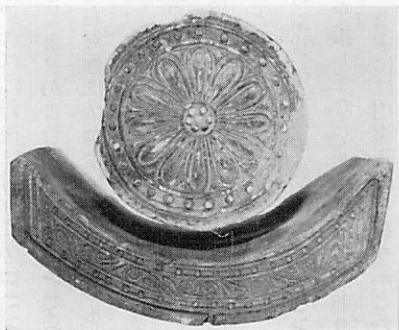
### 第38次調査 宮域東部

調査地域は第2次内裏外郭外の東にあたり、1965年報で報告した第21次調査地域の南に接している。この地域は中央を東西に走る築地によつて大きく南北の両地区に分けることができる。

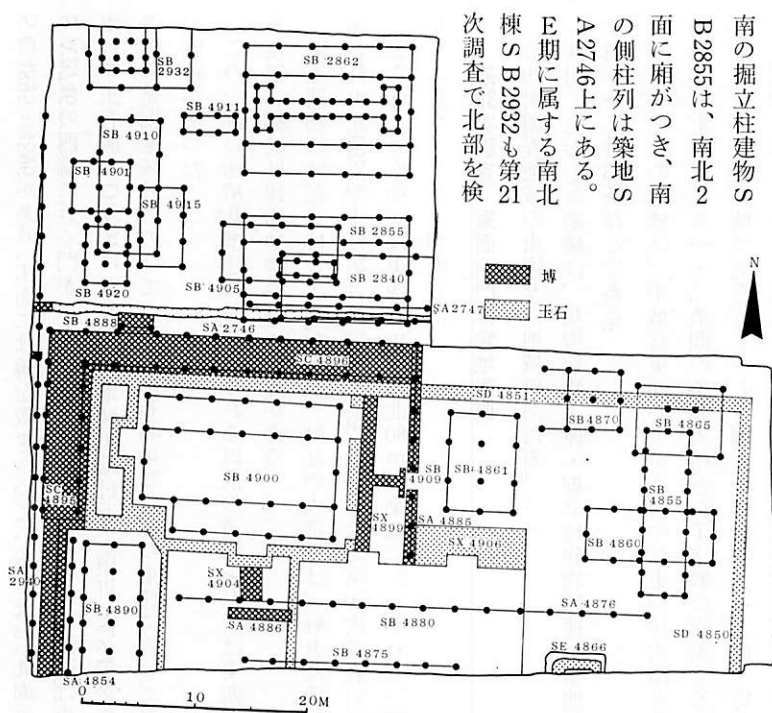
#### 北地区

中央の築地以北の地区は、第21次調査であきらかにした築地または柵で外周を画される官衙の一区画の南西部四分の一ほどにあたる。ここでは第21次調査でA～Eの5期の造営がみとめられ、今回の南西部の調査ではそのうちのB～E期に属する遺構を検出した。

B・C期に属する遺構はすでに第21次調査で検出したものの延長



第6図 軒瓦組合 6135—6688



第7図 第38次調査地域実測図

部分である。D期には南北に平行する2棟の東西棟建物S B2862とS B2865がある。建物S B2862は南北に廂がつき、身舎内部には付属施設の柱穴と考えられる小柱穴列がある。この建物ははじめ掘立柱建物だったが、のちに礎石にしかえたらしく、その根石が掘立柱柱穴に重複して残っている。

出したもので、今回の調査により桁行7間と判明した。この建物の身舎内部の南北両端には、桁行梁行ともに3間の内部施設の小柱穴がある。

この地区は、東・西・北の3面が築地で画され、その内部に埴積基壇建物が造営されている。埴積基壇建物は4棟あり、北の東西棟S B 4900は復原高0.6mの埴積基壇をもつ掘立柱建物で、南北2面に廂をもつ。基壇の西南隅は1間分切り欠かれており、その位置に存すべき南側柱西第1柱はない。基壇の東に2カ所、南と西に各1カ所、3級4段の埴積の階段(幅3m、長さ1.1m)がある。基壇の周囲には玉石と埴の雨落溝がめぐっている。東階段の前面には埴敷の舗道がT字形に設けられている。基壇の東4.5mと南階段前には基底部を埴積にした土塀がある。T字形の埴敷舗道の突出位置にあたる東土塀の中央1間分は門になっている。いずれも目隠し風の機能をはたしたものであろう。

S B 4900の西南に接する南北棟S B 4880は埴積基壇をもつ礎石建物であり、S B 4900と接する基壇の東北隅は斜めに切られている。S B 4900の東南に接して建つ埴積基壇建物S B 4880は後世の削平がはなはだしく、柱痕跡を検出できなかったが、礎石建物であらう。建物南辺は調査地域外にある。この建物の北2カ所に階段があり、西よりの階段はS B 4900の東面の埴敷舗道に面し、東よりの階段の前面は広い玉石敷となっている。この玉石敷S X 4906の北、S B 4900の東にある南北棟S B 4861は掘立柱建物で、削平が著しいが、埴積の痕跡があり、埴積基壇をもつたものであろう。

S B 4900の西と北には、築地S A 2746と2940を利用した築地片廊廊

S C4895・4896があり、床面には埴を敷きこめている。なお、北面築地 S A2746の西端に近く門がひらいている。S B4900の北雨落溝は東へ流れ、玉石溝 S D4851になり、調査地域東端付近で南折へ(S D4850)、さらに発掘地域外にのびている。玉石溝 S D4850の東側にそって築地の痕跡があつた。

この一群の埴積基壇建物が造営される以前の遺構としては東西柵 S A4876・掘立柱建物 S B4870・4880がある。

出土遺物には瓦・埴・土器があり、軒瓦の大部分は、軒丸瓦 533型式と軒平瓦 6688型式の組合せである(第6図)。なお第40次調査の結果によるとこの南地区は東西65m、南北80mの築地にかこまれた一郭の北半にあたる事が判明した。

### 第39次調査 東面南門推定地東側

第29次調査地域の東隣りの地域にあたる。

検出したおもな遺構は、基壇建物1棟・掘立柱建物10棟・築地3条・柵9条・溝13条などである。

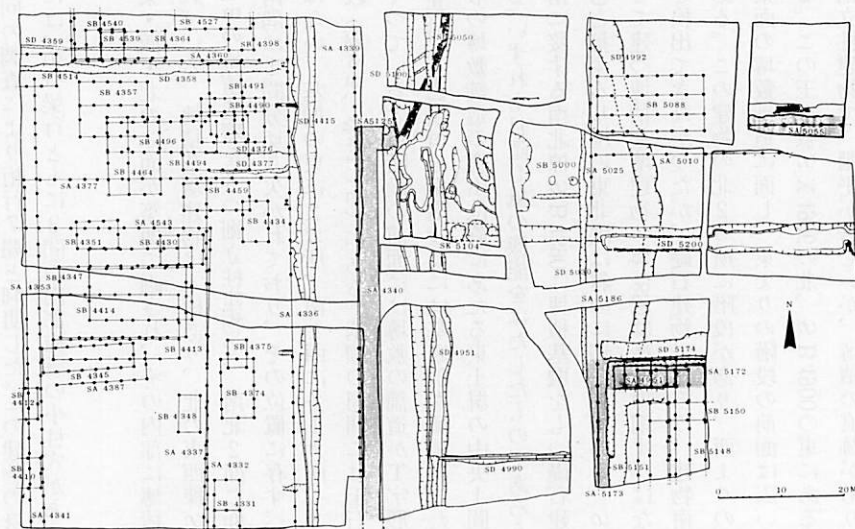
これまでこの地域は、平城宮東面の大垣に沿った東一坊大路と東面南門から東に延びる一・二条間の条間大路とがT字形に交差する地点と推定していた区域である。しかし、調査の結果によると東一坊大路は、条間大路とL字形に接続しそれ以北には延長せず、その接続点に南面する門のあることが判明した。したがって宮域は、第29次調査で検出した東面大垣の途切れる地点から東方に張り出すことになる。

条間大路は路面幅約15mで、その南北に沿って側溝とみられる東西溝 S D5200と S D5174がある。S D5200は側壁に玉石を乱石積みにし

ているが、その大部分は抜き取られている。S D5174は素掘りで、護岸施設は認められなかった。

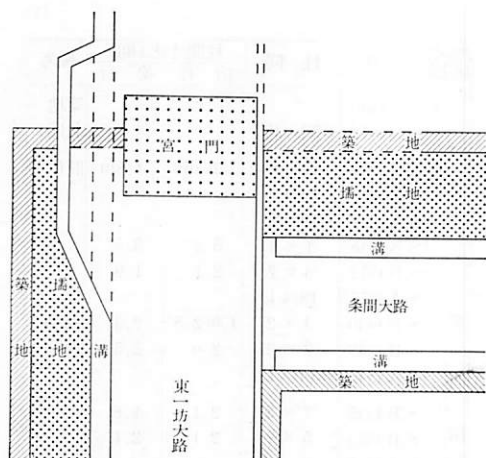
東一坊大路は路面幅約22mで東西両側に側溝の S D4951と S D5030が走っている。

条間大路と東一坊大路がL字形に接する地点の北に基壇建物 S B5000を検出した。東一坊大路はこの建物でさえぎられて、北へ延びないことになる。この S B5000は西半部が大きく破壊されており、この部分で転倒した礎石を2個検



第8図 第29・39次調査地域実測図





第9図 東面大垣屈曲部模式図

第3表 第39次調査発見建物

建物	柱 間	柱間寸法(廂)		備 考
		桁行	梁行	
S B5088	7間×3間	2.4m	2.9m(2.6)	間仕切り 北西廂 東廂
S B5148	6以上×2	3.0	3.0	
S B5149	4×2	2.1	2.1	
S B5150	4以上×3以上	2.9	2.9	
S B5151	7以上×3	2.4	2.9(2.4)	

出した。東半部でも一部に基壇盛土と礎石据付けの痕跡があるのみであつた。このように基壇盛土はほとんど削りとられ、礎石位置も不明確で、建物規模を確実に知りえないが、礎石の転倒状況や残存部分から、ほぼ東一坊大路の路面幅については造られた建物であろう。この北側で検出した凝灰岩列もこのS B5000の付属施設の一部と推定している。

このS B5000には、のちに述べる東西柵S A5010がとりつく形になつてゐることや、大路の接続点にあることから、東一坊大路の突きあたりは南面してたつ門と考えられる。その南にある土塙S K5104から多量の松皮の断片や手斧による用材の削りくずなどとともに「作門所」の文字を記した木簡が出土したことは、この推定を裏書きするものと

言えよう。

ところで東一坊大路の西側溝S D4951は、このS B5000の西側付近で後に埋め立てられ、あたらしく西に迂回させている(S D5100)。しかし、この迂回溝はその角度が急なためか、間もなくゆるやかなS D5050に改修し、S B5000の南約45mの地点でもとのS D4951に合流するようにしている。このS D5050は、発掘区北端から約20mの間では溝底に径20～30m大の自然石を敷きつめている。おそらく迂回溝S D5100はS B5000の造営にともなつて設けられたかとも考えられるが、なお決し難い。しかし、S B5000の造営年代推定にはこれらの溝の存在年代が問題になる。出土した木簡の年紀はS D4951では「養老」「神亀」であり、S D5100では「神亀」「天平勝宝」「天平宝字」であつて、S D5100の上限を神亀年間におさえることも可能であらう。いずれにせよ、土器などの出土遺物の今後の検討をまちたい。

条間大路の北では、約20mの位置に平行して、東西方向の築地S A5055と柵S A5010を検出した。両者の前後関係は不明だが、いずれにせよこの種の区画を限る機能をもつ構築物の存在や門S B5000の存在から、宮がこの部分で東へ張り出していた可能性は極めてたかい。この張り出した宮域内には、柵の北に倉庫ふうの東西棟建物S B5088がある。

発掘地の東南部では、東一坊大路東側溝と条間大路南側溝に沿つて地山をけずりだした基部をもつ築地S A5172とS A5173を検出した。この築地は左京二条二坊三坪の西北隅をかき取るものである。この築地と第29次調査の成果とを総合すると、東一坊大路の幅は築地心々距離

(1)

地区	時期	遺構	柱間	柱間寸法(廂)			備考
				桁	行	梁	
東面	A	S A 4340	7間×4間	2.4m	1.8m		築地 北廂
		S B 4414					
	B	S B 4331	4以上×2				間仕切
		S A 4336	32以上				
		S A 4337	19以上				
		S B 4348	1×1	5.8	3.5		
		S B 4372	3×2	2.1	1.9		
	C	S A 4377	18以上	4.0(2.8)	2.3	2.5	西廂 西廂
		S B 4430	3×2				
		S B 4539	3×2				
	D	S A 4543	14以上	2.1	1.8	2.1	
		S B 4345	7×2				
南門	A	S B 4364	5×2	2.1	2.4	2.4	
		S A 4387	9				
	B	S B 4410	2以上×2	2.2	2.2	2.5	
		S B 4412	2以上×2				
		S B 4351	3×2				
		S B 4491	5×2				
		S A 4332	23以上				
	D	S A 4353	21以上	2.1(3.0)	2.5	2.5(3.0)	南廂 南廂 西廂 北廂
		S A 4360	14以上				
		S B 4374	4×2				
		S B 4413	8×4				
		S B 4464	5×3				
推定地	E	S B 4494	5×3	2.3(3.8)	2.4	2.5	
		S B 4514	3以上×2				
		S B 4527	5×?				
		S A 4341	31以上				
		S B 4347	8×4				
	F	S B 4357	5×3	2.1	2.4(3.7)	2.0	南廂 北廂
		S B 4375	2×1				
		S B 4398	3以上×2				
		S B 4459	5×2				
		S B 4490	6×3				
その他	S	S B 4496	9×2	1.9	2.4	2.0	
		S B 4540	4以上×2				
その他	S	S A 4339	35以上	2.0	2.0		
		S A 4339	35以上				

(2)

地区	時期	遺構	柱間	柱間寸法			備考
				桁	行	梁	
宮城東部北地区	B	S A 2746	17	2.6			築地
		S A 2747					
	C	S A 2940	23以上	2.8			
		S B 2840	7×2				
	D	S B 4910	4×2	3.0	2.7	2.4	南北廂 南北廂
		S B 2855	5×4				
		S B 2862	5×4				
		S B 4911	3×1				
		S B 4915	3×2				
	E	S B 2932	7×3	3.0	2.0	2.6	東廂
		S B 4905	4×2				
		S B 4920	3×2				
宮城東部南地区	F	S B 4901	3×2	1.7	2.3		
		S B 4901	3×2				
	A	S B 4860	5×2	2.4	2.6		玉石溝 玉石・埴溝
		S B 4870	2×2				
	B	S D 4850	5以上	2.4	2.0	3.0	玉石井戸
		S D 4851					
		S A 4854					
		S B 4855					
		S B 4861					
	C	S E 4866	9	2.8	2.8		埴積基壇 土塀 土塀 門 埴積基壇 片廂廊 片廂廊 埴敷舗道 埴積基壇 埴敷舗道 玉石敷 門
		S B 4875	15				
		S A 4876					
		S B 4880					
		S A 4885					
宮城東部南地区	D	S A 4886	5以上×2	2.4	2.5	3.0	
		S B 4888					
		S B 4890					
		S C 4895					
		S C 4896					
	E	S X 4899	6×1	3.0	3.0	3.0	
		S B 4900	10×1				
		S X 4904	6×4				
		S X 4906					
		S B 4909					
その他	F	S B 4865	1×1	7.5	6.2		
		S B 4865	1×1				

で約36mあり、堀地は約10mの幅をもつ。条間大路はS A 5055の南端が明確でないが、この延長上の柵S A 5010とS A 5172S中心の間の距離がやはり約36m(12丈)ある。堀地はやや広く、約11mの幅をもつ。

この地域で検出した建物は、S B 5148・S B 5149・S B 5150・S B 5151の4棟で、順次に建てかえられている。

なお、築地と同様にこの地域の西北隅をかぎるように検出された溝S D 5170・5171は南で西に折れ、東一坊大路を横断してS D 4951にそそいでいる。

横断部は木樋S D 4990をふせて暗渠としている。

出土遺物としては、多量の土器片、瓦片が見られ、他に木簡・木製品・金属製品などが出土した。特殊なものとしては緑釉埴・砥石などがある。

また、発掘区のほぼ中央で検出した古墳時代の溝S D 4992からは、五世紀初頭の多量の土器・埴輪片と木製品が出土した。

第4表 第29・33・36・37・38次調査発見遺構

昭和41年度平城宮発掘調査概報

地 区 期	遺 構	柱 間	柱間寸法		備 考
			桁行	梁行	
第2次内裏外郭東部	A S A 705	21以上	3.0		築 地
	S B 3480	5 × 2	3.0	3.0	
	S B 3500	5 × 2	3.0	3.0	
	S B 3530	9 × 2	3.0	3.0	
	S B 4215	1 × 1	3.0	3.0	礎 石 築 地
	S A 4230				
	S B 4235	1 × 1	2.8	1.1	
	S D 4240				
	S A 4245	3	2.7		門 暗 渠
	S B 4265	3 × 2	2.5	2.4	
	S X 4285				
	S B 4290	9 × 2	3.0	3.0	
	S B 4300	5以上×4	4.5	4.5	南北廂
	B S B 3440	7 × 2	3.0	2.9	
	S B 3520	7 × 5	2.8	3.0	
	S B 4270	5 × 2	2.7	2.9	
	C S B 3550	5 × 2	3.0	2.8	東西廂
	D S B 3430	5 × 2	2.6	2.6	
	S E 4250				
	S B 4255	2 × 2	2.5	2.0	
	S B 3460	5 × 4	2.7	2.0 3.3	井 戸
	S B 3465	3 × 2	2.6	1.2	
					4 面廂

地 区 期	遺 構	柱 間	柱間寸法(廂)		備 考
			桁行	梁行	
第2次内裏北地域	A S B 4700	間 間 11 × 5			4 面廂 東西廂 東西廂
	B S B 260	7 × 4	3.0	3.0	
	S B 4660	7 ? × 4	3.0	3.0	
	S A 4690	12	3.0		
	S A 4591	5	2.0		4 面廂
	S A 4592	18以上	3.0		
	S B 4703	9 × 4	3.0	3.0	
	S B 4710	9 × 2	3.0	3.0	
	S B 4715	3 × 2	2.2	2.2	水溜め 南北廂 4 面廂 南 廂
	S X 4750				
	B' S B 054	9 × 4	3.0	2.9	
	S B 4704	9 × 4	3.0	3.1	
	S B 4780	7 以上 × 3	3.0	3.0	4 面廂 南 廂
	S A 4781	2	3.0		
	S A 4782	4	3.0		
	S B 4800	9 × 4	3.0	2.9	
	C S B 033	12 × 3	2.9	3.0	南 廂
	S B 4650	7 × 2	3.0	3.0	
	S B 4670	5 × 2	3.0	3.0	
	S B 4680	5 × 2	3.0	3.0	
	S A 4683	4	3.0		北 廂
	S A 4684	4	2.9		
	S A 4686	4	3.0		
	S B 4705	7 × 4	3.0	3.0	
	S B 4712	3 × 2	2.9	2.9	南 廂
	S A 4760	21以上	3.0		
	S A 4761	22以上	3.0		
	S B 4770	7 ? × 2	3.0	2.7	
	S B 4790	7 × 2	2.4	3.0	
	S B 4830	12 × 3	2.9	3.0	

地 区 期	遺 構	柱 間	柱間寸法		備 考
			桁行	梁行	
宮城西部の他	A S A 5270	34以上	3.0		東西廂 井 戸
	S D 5275				
	S D 5280				
	S B 5300	10以上 × 4			
	B S E 5320				南 廂 橋
	S A 5260	36以上	2.8		
	S B 5290	4 × 2	2.2	2.0	
	S B 5310	8 × 3	2.8	2.5	
	S X 5330				
	S A 5340	13以上	2.8		

(猪熊兼勝・森郁夫)

表中の時期区分 A・B・C は、同一地区での相対的な序列であつて、各地区に共通したものではない。また柱間寸法は概数値を示す。